

「男、突っ走る！」

第40回

第一稿

作・壽倉 雅



1 ラーメン屋（夜）

雅也と雪奈がラーメンを食べながら話している。

雅也「制作展終わってすぐなのに、ごめんね。わざわざ学校来てもらって」

雪奈「私は良いの。どっちにせよ学校に行く予定あったし、名古屋市内に住んでる私からしたら、学校なんて三十分もあれば来れるの。それに、うちーからあんなSONのLINEもらったたら、何事かと思うじゃん。それに、来年の実行委員会もやらないなんて言い出すし、どうしちやったのかと。思って。普段うちーは、相談される側でしよ、私だってどれだけうちーに相談に乗ってもらったか。だから、あんなLINEを私に送ってくるってことは、よくよくのことがあるって、大変な精神状態なんだろうなって……」

雅也「まあね……。誰かに話を聞いてもらいたいと思って、つい、ゆきちゃんに相談し

ちゃったんだよね」

雪奈「私は正直嬉しかったよ。うちーが、相談してきてくれたこと」

雅也「何だろうね。ふと、ゆきちゃんが思い浮かんだんだよね」

雪奈「私は、眞榮田戸の件で、散々うちーに迷惑かけたからね」

雅也「そんなこと」

雪奈「うちーが、私に話をして少しでも気が晴れるんだったら、いくらでも話して」

雅也「ありがとう、ゆきちゃん」

雪奈「うちーのLINEで、先輩からの文面送ってもらったでしょ。私、あの文章読んだ時、はらわたが煮えくり返ったもん。

うちーだって、ちゃんと実行委員やってたことも知ってるし、先輩が完璧だったかと思うと、私はそうは思わない。それで、うちーだけを悪者にするのは違うんじゃないかな」

雅也「…」

雪奈「先輩同士の仲も悪かったらしいじゃん。

その間に入ってたのは、うちーでしょ。

うちーが中間管理職みたいなポジションで、板挟みになりながらも対処してくれたから、トラブルだって最小限に抑えられたじゃないの？ それを、うちーがやるのが当たり前みたいになってさ……。なのに、うちーに感謝の言葉どころか、役に立たなかったなんて、よくもそんなことはつきり言えたもんだよ。うちーだって、苦手な先輩との間に挟まれて、どれだけストレス抱えてたか。準備の間、うちーが疲れてるのは、何となく気が付いてた。だから、イベント終わって解放されたと思ったら、先輩から追い打ち駆けるようなLINEもらってさ。うちーをここまで粗末に扱うなんて許せない。あの先輩、作品のクオリティは凄いつて思ってたけど、それでも良い話が出てこないっていうのは、結局人間性に問題があるってことだよ」

雅也「ありがとう。気にかけてくれてただけで、嬉しいよ。これまでこんな相談、誰にもしたことなかったから」

雪奈「間に挟まれて、うちーも誰かに相談する心の余裕がなかったんだよね」

雅也「まあね……。準備に追われて、いろんな人にサンドバックみたいに扱われて、精神的に限界だったのかもしれない」

雪奈「もうこれまでのことは忘れなよ。辛いことを思い出したってどうしようもないじゃない。私たち、四月から二年生になるんだし、後輩も入ってくる。先輩たちを反面教師にして、私たちは私たちで、後輩を思いやれる先輩になろうよ」

雅也「そうだね。あつという間の怒涛の一年だったから、これからまた、新しい一年を頑張らないとね」

雪奈「そうそう。(とメニューを見て) ねえ、餃子食べよっか？」

雅樹「うん、食べよう食べよう」

笑顔が戻っている雅也。

2 名古屋芸術専門学校・屋上（数日後）

裕司が煙草を吸っている――傍らに、  
缶コーヒーを飲んでいる和也。

裕司「春休みで授業もないのに、つい学校来  
ちやうんだよな」

和也「落ち着くんだよな」

裕司「そうそう」

和也「せっかく来てるから、新年度の準備も  
したいしね」

裕司「そういえば、この間あつぽんから聞い  
たけど、お化け屋敷のリーダー、やっすー  
がやるらしいじゃん」

和也「うん。せっかくの機会だから、やって  
みようと思ってる」

裕司「俺も協力する」

和也「おっくーもいてくれたら、心強いわ」  
と、雅也と拓海が話しながら入ってくる。

拓海「そりゃ、うちーに頼まれたら断れないわなあ」

雅也「ありがとう。ゆきちゃんは、もうオツケーもらってる」

拓海「専攻が多いほうが良いもんね」

と、自販機のジュースを買う。

裕司「何の話？」

雅也「（裕司たちに気づいて）ああ、二人ともお疲れ。新入生歓迎会の相談をしたの」

裕司・和也「新入生歓迎会？」

雅也「四月最初の新入生オリエンテーションの日に、新入生歓迎会をやるうと思ってるね。それで今、歓迎会と一緒に準備してくれるメンバーを募集してるの。今決まってるのは、俺とゆきちゃんとぐっち。あ、良かったら二人ともどう？ ゲーム系もメンバーがいてくれたら、レクリエーションの準備を任せたいと思うんだけど」

拓海「それ良いね」

和也「俺たちで良ければ。（と裕司に）ねえ」

裕司「もちろん。新入生歓迎会は、俺にとっても思い出ある行事だから。ねえ、うちー」

雅也「そうだったね」

和也「どういうこと？」

雅也「ちょうど一年前、新入生歓迎会の時に、

俺はおっくーとゆきちゃんと知り合ったの」

裕司「早いなあ、あれからもう一年だよ」

雅也「原点に戻って、新入生歓迎会を企画して、新しく入ってくる後輩たちを盛り上げた状態で迎えたいと思って」

和也「その思い、良いと思う。何でも言うて

よ、俺手伝うから」

裕司「けど、お化け屋敷の準備は良いのか？」

雅也「お化け屋敷？」

裕司「やつすー、お化け屋敷のリーダーやるんだって」

雅也「そうなんだ」

拓海「俺は、もう実行委員入るって決めてる」

雅也「俺だって、もちろんやりますとも」

和也「ありがとう」

雅也「やつすーは、お化け屋敷の準備優先で大丈夫だからね。何なら、新入生歓迎会の時にメンバー募集しちゃっても良いし」

和也「ありがとう」

雅也「よし、早速顔合わせの日程と、メンバーの正式決定しないとな」

3 同・5階・503教室

雅也、雪奈、直也、裕司、拓海、和也が会議をしている。

N「数日経ち、新入生歓迎会の実行委員会が立ち上がりました。メンバーはシナリオライター専攻の僕、雑貨専攻のゆきちちゃん、CG・映像専攻の加藤、コミックイラスト専攻のぐっち、ゲームプランナー専攻のおつくー、ゲームプログラマー専攻のやつすーという、専攻の違うメンバーがそれぞれ顔を揃えることになりました」

と、ノック音がして、吉野が入ってくる。

吉野「お疲れ様、みんな」

一同「吉野さんッ」

吉野「教務で聞いたの。みんなが、新入生歓迎会の準備をしてるって。SNSで告知したいんだけど、良い？」

雅也「もちろんです」

吉野「会議してる様子が良いかな」

雪奈「そのほうが、雰囲気出て良いと思います」

吉野「じゃあ、私に構わず会議続けて」

と、会議の様子をスマホで撮影する。

吉野「みんな、頑張ってね。楽しみにしてるから（と出ていく）」

直也「告知する以上は、ちゃんとしたものをやらないとね」

雅也「もちろん」

裕司「じゃあ、レクリエーションの内容は、俺とやっすーで決めてくね」

雅也「うん、お願いします。（と拓海に）ぐっちは、告知用のチラシの制作お願い」

拓海「任せろ。みんなの似顔絵付きのポップ

なやつ作るよ」

裕司「これは、楽しみだな」

雅也「ゆきちゃんとか藤は、当日必要なお菓子の買い出しお願い」

雪奈「分かった。あ、でも先に下見したほうが良いよね。予算のこともあるだろうから」

雅也「そうだ。予算のこと、教務に相談しないとな……。先にゆきちゃんと加藤で下見して、お菓子が大体いくらぐらいなのか、結果を教えて。それで概算で予算書作って、教務と相談してみる」

雪奈「了解」

加藤「分かった」

雅也「じゃあ皆さん、よろしくお願いします  
(と頭を下げる)」

4 同・同・502教室

雅也がパソコンで書類を作っている――  
ドアが開き、和也が入ってくる。

和也「おつかれ、うっちー」

雅也「ああ、やっすーおつかれ。ありがとね、今日は」

和也「何してるの？」

雅也「今日の会議の議事録作ったの。何を話して、何を決めたのか、次の会議までに何をしてくるのか、次の会議で何を相談するのか、いろいろまとめておきたくてね」

和也「分かるわ、そういうのがあると便利だね」

雅也「俺自身が、忘れちゃうタイプだからさ。まとめとかなないと、後にみんなに迷惑もかかるし」

和也「そっか」

雅也「やっすーのほうこそ、お化け屋敷の準備、もう始めてるの？」

和也「それなんだけどさ、ちよっとうっちらーにお願いがあって」

雅也「何？」

和也「お化け屋敷の副リーダーやってほしくてさ、うっちらーに」

雅也「（キーボードを打つ手を止めると）江、俺が？」

和也「うちーなら、会計とか細かい事務的な事お願いできるんじゃないかと思って。

お化け屋敷ってさ、準備にいろいろかかるじゃん。衣装とか化粧とかさ」

雅也「確かに。でも、俺で良いの？」

和也「事務会計といえbaumうちーかなと思つて。ぜひ、お願いしたいと思つて」

雅也「分かった。ここは、情報処理検定とビジネス文書実務検定1級、P検2級、ITパスポート取得者である、このうちーに任せてちょうだい」

和也「え、うちー、いつの間にそんなに情報系の資格持ってたの？」

雅也「高校の時。とにかく検定勉強ばかりの三年間だった」

和也「へえ。でも、ありがたいな。うちーが副リーダーだったら、心強い。実働部隊は、おっくーやあつぽんやぐつちに任せら

れるし」

雅也「新生歓迎会手伝ってくれるんだもん、そこはお互い様だよ」

和也「ありがとう」

雅也「二年生はね、正直ひたすら執筆活動しようと思ってたの。でも、こういう企画を自分から立ち上げちゃってる段階で、大人しくなる気ゼロだよね。どうしても、あれもこれもしたいってエンジンがかっちゃって」

和也「大人しく執筆活動なんて、うちーらしくないよ」

雅也「昔から貧乏性なのかもしれない。何かやってないと落ち着かないの。中学も高校も、学級代表とかクラス議員とか生徒会とか、そういう役やるのが好きでね」

和也「似合いそうだもん、そういうの」

雅也「二年生も、いろんなことやりますか」

和也「一番いろんなことができる一年間だもんな」

雅也「そうだよ。お化け屋敷のことは、またゆつくり相談しよう」

和也「うん、よろしく」

笑顔で頷く雅也。

5 同・3階・デッサンルーム（新年度）

雅也、雪奈、直也、裕司、拓海、和也が、それぞれ準備をしている。

N 「四月になり、僕らは二年生に進級。そして、待ちに待った新入生歓迎会当日がやってきました」

× × ×

一年生たちが、グループごとに集まって座っている――テーブルにはお菓子とジュースが用意されている。

雅也「皆さん、こんにちはッ」

一同「こんにちは」

雅也「今日は、新入生歓迎会にご参加いただき、ありがとうございます。今日、この会を通して、たくさん友達を作ってください。

今日は、専攻の違う我々二年生有志が準備をさせていただきました。改めまして、シナリオライター専攻二年の木内雅也です。よろしくお願ひします。続けて、順番にメンバーの自己紹介です」

雪奈「雑貨専攻の植野雪奈です」

直也「CG・映像専攻、加藤直也です」

裕司「ゲームプランナー専攻の奥村裕司です。つくーと呼んでください。よろしくお願ひします」

和也「ゲームプランナー専攻二年の安永和也です」

拓海「コミックイラスト専攻二年、山口拓海です。お願ひします」

拍手をする一同。

雅也「さあ紹介が終わったところで、早速レクリエーションを始めようと思います。では、おつくールール説明お願ひします」

裕司「はい！ 今から皆さんには、○×ゲームをやっていただきます。問題を出します

ので、皆さんはチームで相談をして、画用紙に○か×かを書いてください。それでは早速第一問。『雑貨専攻の植野先輩は、大型二輪免許を持っている。○か×か』。さあみんな考えてみましょう！」

それぞれグループで相談をしていく一年生たち——雅也たち談笑しながら、各テーブルを回っていく。

裕司「では皆さん、答えを上げてください」  
一年生たち、それぞれ○や×を書いた画用紙を掲げる。

裕司「それではゆきちちゃん、正解をどうぞ」

雪奈「正解は……×です」  
リアクションをする一年生たち。

雪奈「私は、中型二輪の免許はもっています。本当は、大型を取ろうかどうか迷い中です」  
和也「では、第二問。『ゲームプランナー専攻の奥村先輩は、自転車で転んで一回転をしたおとがある。○か×か』」

相談をしていく一年生たち——席を回

っていく雅也たち。

雅也「（裕司に）結構盛り上がるね、これ」

裕司「だろ。こういう時間は絶対あったほうが良いと思って」

雅也「さすがはおっくー」

和也「はい、じゃあ皆さん答えを出してください」

一年生たち、それぞれ○や×を書いた画用紙を掲げる。

和也「では奥村先輩、正解をどうぞ」

裕司「正解は……○です」

リアクションをする一年生たち。

裕司「中学生の時、ぐるっと自転車ごと一回転したことがあります。あの時は、もう命がないと思いました」

和也「じゃあ、おっくーラストお願いします」  
裕司「では、○×ゲーム最後の問題です。」

『シナリオライター専攻の木内先輩は、毎朝、ちゃぶ台でご飯を食べている。○か×か』

相談していく一年生たち——席を回つていく雅也たち。

裕司「では皆さん、答えをどうぞ」

どのチームも○と書いた紙を掲げる。

裕司「では、うちー。正解をどうぞ」

雅也「正解は……×です」

「えーッ」とリアクションをする一年

生たち。

雅也「ちよつと待って。よく見たら、全チー

ム○じゃん」

拓海「そういえば、そうだね」

雅也「今日初めましての俺に、みんなどんな

印象持ってるの」

直也「木内、これがみんなの第一印象なんだ。

受け入れるしかない」

雅也「マジかあ。でもごめんね。（と一年生

たちに）俺、普段テーブルと椅子でご飯食

べてるんだわ」

ドツと笑う一年生たち。

雪奈「ダメだよ。期待に応えないと」

雅也「俺がテーブルでご飯食べるのは、しょうがないでしょ。家のことなんだから」

雪奈「正座しないの？」

雅也「しない」

雪奈「えー。ショック」

雅也「はい、次のコーナー行くよ」

と、笑いに包まれながら進行していく。

N「新入生歓迎会は大成功を収めました。参加してくれた一年生の楽しむ姿を見て、この一年も頑張れると思えることができました」

6 同・4階・廊下（数日後）

雅也と和也が、書類を見ながら相談をしている。

N「そして、休み間もなく、今度はやっすーと共に学園祭のお化け屋敷の準備がスタートしました」

和也「じゃあ俺は、教務に行って、メンバー募集告知メールを、学生の一斉メールで送

ってもらおうように頼んでくる」

雅也「たくさん来てくれると良いね。特に一年生は、来年以降のこともあるからね」

和也「そうだよな」

と、雅也のスマホに着信が来る——正

樹からである。

雅也「大久保……？（と怪訝な顔で出ると）

もしもし大久保？ え、今？ 学校にいる

けど。うん……うん、分かった。今夜なら

空いてるけど。はいはい、じゃあまたL I

NEして。じゃあね（と電話を切る）」

N「加藤や眞榮田と同じCG・映像専攻の大久保が電話をしてくるのは初めてのことでした。相談したいことがあると言われたものの、普段接点が少ないだけに、一体何事かと皆目見当もつきませんでした」

つづく